

村ノ内町遺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

村ノ内町遺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、集合住宅新築工事に伴う村ノ内町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

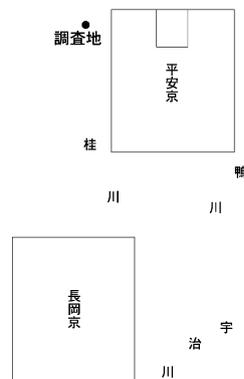
平成 22 年 7 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 村ノ内町遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区常盤出口町5番地他
- 3 委 託 者 医療法人 トキワ会 理事長 伊藤哲雄
- 4 調査期間 2010年5月6日～2010年6月10日
- 5 調査面積 258 m²
- 6 調査担当者 上村和直・内田好昭・小檜山一良
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。掘立柱建物と柱列は個別に番号を付した。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小檜山一良・上村和直
- 14 執筆分担 上村和直：1、小檜山一良：2～5
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の経緯	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と歴史的環境	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構の概要	7
(3) 遺構	7
4. 遺 物	21
(1) 出土遺物の概要	21
(2) 縄文時代の遺物	21
(3) 弥生時代の遺物	22
(4) 古墳時代後期から飛鳥時代の遺物	23
(5) 室町時代以降の遺物	25
5. ま と め	27

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1-2面全景（北から）
		2	竪穴住居29・103（北から）
図版2	遺構	1	竪穴住居29（西から）
		2	竪穴住居30（西から）
図版3	遺構	1	竪穴住居103（北から）
		2	竪穴住居115（南東から）
図版4	遺構	1	竪穴住居140（北から）
		2	竪穴住居82・84（北西から）
図版5	遺構	1	竪穴住居82（北から）
		2	竪穴住居106（東から）
図版6	遺物		縄文土器・弥生土器
図版7	遺物		古墳時代から飛鳥時代・室町時代以降の土器

挿 図 目 次

図1	調査前全景（北西から）	1
図2	作業風景（南から）	1
図3	中学生チャレンジ体験風景	2
図4	現地説明会風景	2
図5	調査区配置図（1：500）	2
図6	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図7	調査区断面図1（1：50）	8
図8	調査区断面図2（1：50）	9
図9	第1-1面遺構平面図（1：150）	10
図10	第1-2面遺構平面図（1：150）	11
図11	掘立柱建物1・2実測図（1：50）	12
図12	柱列3実測図（1：50）	13
図13	竪穴住居29・30実測図（1：50）	14
図14	竪穴住居82実測図（1：50）	15
図15	竪穴住居84実測図（1：50）	16
図16	竪穴住居103実測図（1：50）	18
図17	竪穴住居121・140実測図（1：50）	19
図18	竪穴住居121（南から）	20
図19	竪穴住居187（西から）	20
図20	竪穴住居106・252（北から）	20
図21	出土土器実測図（1：4）縄文・弥生時代	22
図22	出土土器実測図（1：4）古墳時代から飛鳥時代	24
図23	出土土器実測図（1：4）室町時代以降	25

表 目 次

表1	周辺既往調査一覧表	5
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	21
表4	掲載土器観察表	26

村ノ内町遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経過

調査対象地は、京都市右京区常盤出口町5番地に所在し、この地に高齢者向け集合住宅が新築されることになった。当地は村ノ内町遺跡の範囲にあっており、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という。）が試掘調査を実施した。

試掘調査は、敷地内の中央に逆T字形のトレンチを設定して行われた。その結果、地表下約0.5mで中世の遺物包含層を、さらに下層から飛鳥時代の竪穴住居を検出し、当該期の土師器・須恵器などの遺物が出土したため、対象地内に飛鳥時代以降の遺構が良好に残存していると判断された。この結果から、市文化財保護課は医療法人トキワ会に対し発掘調査の指導を行った。調査は、医療法人トキワ会から財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、市文化財保護課の指導の下、発掘調査を実施することとなった。

今回の調査では、これまでの周辺地域の発掘調査・立会調査などの調査成果に基づき、弥生時代から古墳時代の遺構および、飛鳥時代の竪穴住居を検出するとともに、当地域の変遷を明らかにすることを目的とした。

(2) 調査の経緯

調査区は、市文化財保護課の指導により、試掘調査の結果から遺構の残存状況が良好と考えられる調査対象地南半分に、東西約16m、南北約16mの規模で設定した。

発掘調査は、2010年5月6日に機材・発掘用具を搬入し、同日から遺構面（第1面、地表下0.4～0.7m）まで機械掘削を実施した。遺構面は1面で、攪乱などを掘削した後、遺構検出状況を記録した。その後、5月10日から人力で中世以降の柱穴・溝・土坑などの遺構調査を開始した。



図1 調査前全景（北西から）



図2 作業風景（南から）



図3 中学生チャレンジ体験風景



図4 現地説明会風景

中世以降の調査終了後に飛鳥時代の遺構調査に着手した。飛鳥時代の竪穴住居・柱穴は重複しているため、新しい遺構から調査を進め、順次全景写真撮影・平面実測を実施した。その後、重複した竪穴住居などの調査を行い、写真撮影、平面・断面実測を実施した。

また、市文化財保護課の指導と委託者の了解のもとに、竪穴住居の範囲確認のために北西部と西部の2箇所を人力で計約2㎡拡張した。これにより拡張区では、新たな竪穴住居と土坑を確認し、遺構掘削の後、写真撮影および実測図の作成を行った。

さらに下層遺構の有無と堆積状況の確認をするため、調査区の4面の壁沿いに断割りを行い、断面写真撮影・土層断面図を作成した。最後に資材を撤収し、6月10日に全ての作業を終了した。

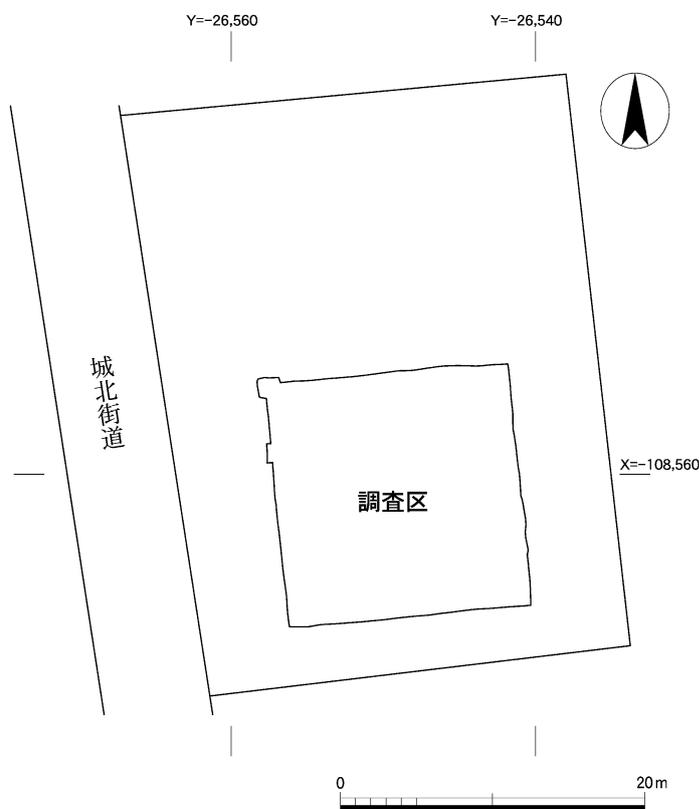


図5 調査区配置図(1:500)

なお、調査の進行に伴い5月6・10・13・18・26日、6月4日の6回にわたり市文化財保護課の視察を受け、その指導の下に調査を行った。

なお、5月25日には、中学生チャレンジ体験を実施し、4名の中学生に、竪穴住居の掘削と住居の骨組み復元作業を体験させた。

また、飛鳥時代の竪穴住居、室町時代の柱穴や土坑などの発掘成果の公開を目的に、5月29日には現地説明会を実施し、あわせて周辺遺跡からの出土遺物の展示なども行い、約350名の市民の参加があった。

2. 位置と環境

(1) 位置と歴史的環境

調査地は京都市右京区常盤出口町5番地で、双ヶ岡二ノ丘の西約400mにあり、新丸太町通と宇多野吉祥院線（城北街道）の交差点北約200mに所在する。一帯は周辺地域に比べ比高差1m前後の微高地となっており、これは南東方向に流下する御室川の右岸に形成された自然堤防とみることができる。

常盤地区の北方には音戸山が見わたせ、北東には御室川の谷を隔てて白砂山が位置する。谷を流れ出た御室川の水流は、双ヶ岡一ノ丘の崖面を浸食しつつ双ヶ岡の西辺を蛇行して、双ヶ岡三ノ丘の南で双ヶ岡の東麓を流れる西ノ川と合流し、さらに紙屋川と合流して南下している。御室川は双ヶ岡一ノ丘崖面に規制されるため南西方向にその流れを変えやすく、氾濫を繰り返しながら扇状地性の低位段丘を形成してきた。これまでの調査で明らかとなっている旧河道の一つが、現在の鳴滝桐ヶ淵町付近から京福電鉄北野線に沿って南下し、常盤窪町、太秦西蜂ヶ岡町を経て、帷子ノ辻付近に至るもので、これによって扇状地性の低位段丘の西辺部が限られている。

常盤・太秦地区の遺跡は、弥生時代中期と弥生時代末から古墳時代初頭の遺跡も重複する村ノ内町遺跡、和泉式部町遺跡が知られている。古墳時代中期の遺構は、和泉式部町遺跡で確認されるが、常盤・太秦地区の中心地域では古墳時代後期になってから遺跡の広がりが見られる。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺跡には、広隆寺旧境内、常盤東ノ町古墳群、常盤仲之町遺跡、村ノ内町遺跡がある。奈良時代から平安時代の遺跡には広隆寺、常盤仲之町遺跡、一ノ井遺跡などがある。

(2) 既往の調査（図6）

調査地周辺では、これまでに多数の発掘調査・立会調査が行われている。以下に、村ノ内町遺跡周辺での主要な調査の概要を記す。

調査2は、1976年に右京区常盤東ノ町26-5番地で織物会社社屋新築工事に伴って実施した発掘調査である。当初は仁和寺子院跡として遺跡登録された地区の調査であった。調査では古墳時代後期の横穴式石室を有する円墳3基、鎌倉時代から江戸時代の土坑墓多数、鎌倉時代から江戸時代の溝3条を検出した。出土遺物には、3基の円墳から出土した土師器碗・壺・甕、須恵器杯蓋・杯身・高杯・壺・脚付壺、鉄製品鏃・刀子・皮吊金具、銅製環・柄頭などがある。また、古墳の封土から弥生時代中期（Ⅱ～Ⅳ様式）の高杯・壺・甕が出土し、弥生時代の遺跡（村ノ内町遺跡）発見へと繋がっていった。

調査3は、1976年に調査2の東隣地である常盤東ノ町7番地で実施した発掘調査である。調査では、調査区の南西部で円墳の周溝と墳丘を検出した。横穴式石室は削平を受けて遺存していない。出土遺物には、古墳時代後期の須恵器杯蓋などがある。

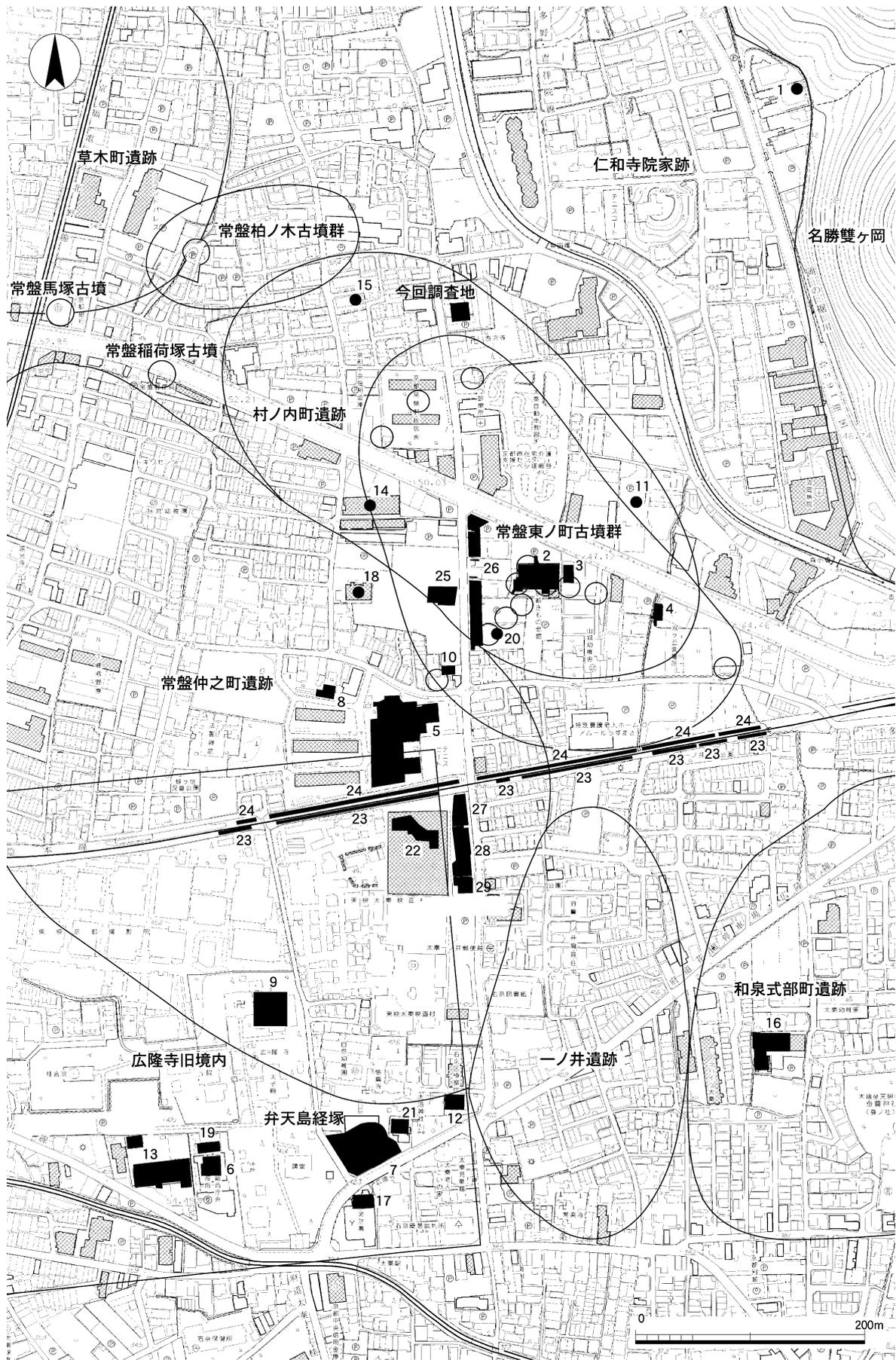


図6 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺既往調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	「平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土坑墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土坑墓群、土師器・須恵器	「常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	「仁和寺子院跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦・須恵器・土師器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査「常盤仲之町集落跡発掘調査報告」京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡 - 右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要 -』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘鋳造遺構	「広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	「和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	「広隆寺旧境内1」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	「広隆寺旧境内2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	「広隆寺旧境内」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	「関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳～飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘	2008.11.10～ 2009.03.17	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
27	2008	発掘	2009.01.20～ 2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の土坑・溝・落込ほか	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
28	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.03.12	飛鳥の竪穴住居、平安の区画施設・溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
29	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.02.02	飛鳥の竪穴住居、平安の掘立柱建物・井戸・土坑・柱穴群、鎌倉～室町の溝・柱穴群	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

※ No.は図4の調査地点の数字と対応

調査4は、1976年に新丸太町通に面した調査3の南東隣接地で、関西電力株式会社の双ヶ岡変電所増築工事に伴って実施した発掘調査である。調査では平安時代中期の土坑を検出した。出土遺物には、弥生時代中期の壺・甕、弥生時代末から古墳時代初めの二重口縁壺・甕、10世紀代の土師器皿などがある。弥生時代末から古墳時代初めの二重口縁壺の出土は、村ノ内町遺跡に古墳時代という新たな時期が加えられることになった。

調査11は、1980年に常盤東ノ町6-3で実施した立会調査である。調査では地表下約0.7mの濃茶褐色泥砂層から弥生時代の土器が出土した。

調査14は、1982年に常盤村ノ内町1-5・14で実施した試掘調査である。調査では表土下0.5m以下で古墳時代後期から室町時代の土坑群・遺物包含層を検出した。

調査15は、1986年に常盤村ノ内町8-20で実施した試掘調査である。調査では地表下約1.0mで弥生時代の土坑、地表下1.56mで弥生時代中期の溝を検出した。

調査20は、1993年に常盤東ノ町16-5で実施した試掘調査である。調査では地表下0.64mで古墳周溝とみられる溝状遺構、平安時代から鎌倉時代の土坑を検出した。

調査25は、2008年に常盤仲之町3-26番地で実施した発掘調査である。調査では、飛鳥時代の竪穴住居、堀状遺構、平安時代の柱穴、池状遺構、土坑、江戸時代の土坑、柱穴がある。遺物には、弥生土器、古墳時代の須恵器、飛鳥時代の土師器、須恵器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦類、江戸時代の土師器、陶器、染付磁器がある。

調査26は、2009年に太秦東蜂岡町で実施した発掘調査である。調査では、平安時代の瓦溜、集石遺構、ピット、掘立柱建物、鎌倉時代から室町時代の落込み、土坑、溝を検出した。遺物には、奈良時代の土師器杯・高杯、須恵器杯、丸瓦、平瓦がある。平安時代の遺物は、土師器皿、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器碗・皿・壺、白磁皿、丸瓦、平瓦がある。鎌倉時代から室町時代の遺物は、土師器皿、焼締陶器、青磁碗・皿、瓦類がある。

参考文献

- 『京都の歴史1』平安の新京（株）学芸書林 1970年
- 『史料 京都の歴史』第14巻 右京区（株）平凡社 1994年
- 横山卓雄『京都の自然史』（株）京都自然史研究所 2004年
- 『京都市遺跡地図台帳』[第8版]京都市文化市民局 2007年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図7・8)

調査地は東西約30m、南北約40mの長方形を呈する敷地で、調査地北部に標高の最高点があり、東側と南側に緩やかな傾斜面をもつ。調査区は、南側中央の位置に東西約16m・南北約16mで設定した。

近現代の盛土層は、約0.3mの厚さがあり、アスファルト片や碎石を多く含み非常に堅く整地されている。その下層には、約0.5mの厚さの暗褐色砂泥を主体とする中世から近世にかけての耕作土層が堆積する。以下は、褐色砂礫または黄褐色粘質土の地山層となる。この地山層を切り込んで各時代の遺構が成立している。

(2) 遺構の概要

縄文時代から近世までの遺構を検出した。主な遺構は、縄文時代の土坑、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居・小穴、室町時代以降の掘立柱建物・柱列・土坑・柱穴群・溝などがある。

ここでは、褐色砂礫層上面まで掘り下げて遺構検出を行ったが、遺構平面図は、室町時代以降(第1-1面)、飛鳥時代以前(第1-2面)の2面に分けて作成した。

(3) 遺構

1) 第1-1面の遺構 (図9)

掘立柱建物1(図11) 調査区の西側で検出した。南北1間×東西2間以上の東西棟と考えられる。西側は調査区外へ広がる。柱穴の底部には、根石を据え付けているものが多い。柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈する。検出面での規模は、径0.4～0.6m、深さ約0.3mである。柱間は桁行が約2.4mで、梁間が約2.6mある。主軸方向はN96.5°W振れる。柱穴66からは室町時代後期の土器類が出土している。

掘立柱建物2(図11) 調査区の西側で検出した。掘立柱建物1と南端部が重複する。南北1間×東西3間以上の東西棟と考えられる。西側は調査区外へ広がる。柱穴の底部には、根石を据え付けているものもある。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈する。検出面での規模は、径0.4～0.5

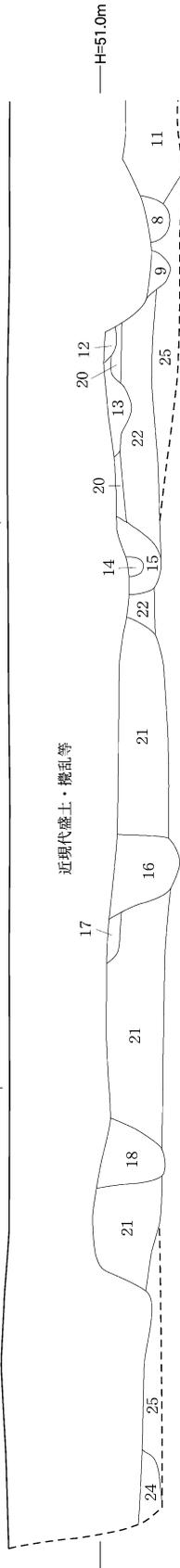
表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
縄文時代	土坑44・45	中期
古墳時代後期 ～飛鳥時代	竪穴住居29・30・82・84・103・106・115・121・140・187・252、 土坑251、落込み57・83、小穴	第1-2面
室町時代以降	掘立柱建物1・2、柱列3、土坑139、溝16、柱穴群	第1-1面

調査区東壁

X=-108.556

X=-108.560

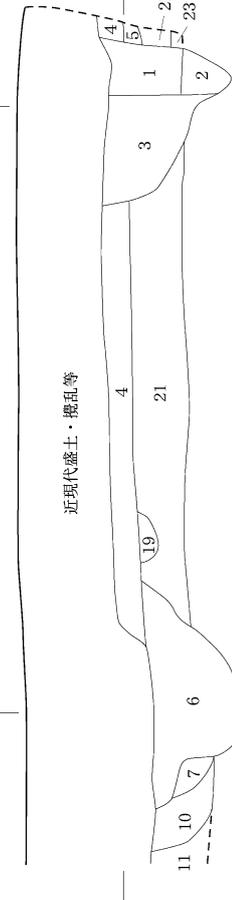


X=-108.564

X=-108.568

土師器混

H=51.0m

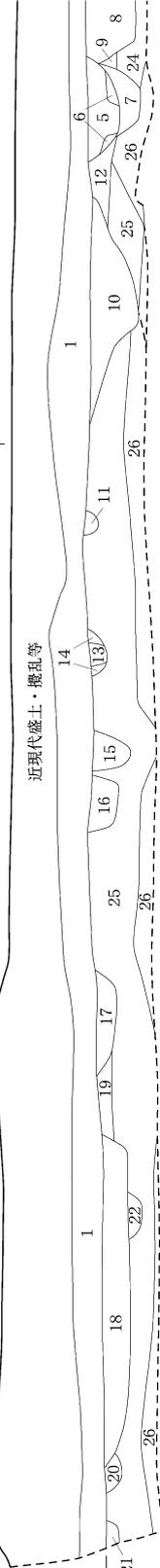


- 1 10YR2/2黒褐色砂泥、土師器混
- 2 10YR2/3黒褐色砂泥
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥
- 4 10YR3/4暗褐色砂泥
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥～泥土
- 6 10YR2/2～2/3黒褐色砂泥
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥
- 8 10YR2/2黒褐色砂泥
- 9 10YR2/4褐色砂泥
- 10 10YR4/4褐色砂泥
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 12 10YR3/3暗褐色砂泥
- 13 10YR3/3暗褐色砂泥
- 14 10YR3/2黒褐色砂泥
- 15 10YR3/3暗褐色砂泥、土師器混
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 18 10YR2/3黒褐色砂泥
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 20 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 21 10YR5/3～4/3にぶい黄褐色粗砂 [地山]
- 22 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 [地山]
- 23 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 [地山]
- 24 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 [地山]
- 25 2.5Y5/3黄褐色粗砂 [地山]

調査区南壁

Y=-26.544

Y=-26.548

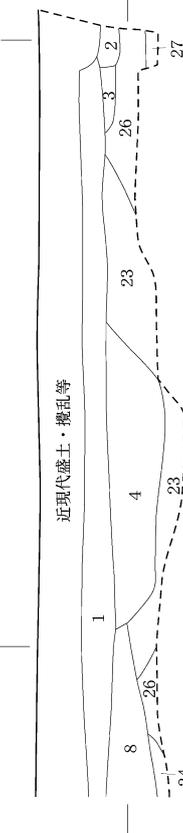


Y=-26.552

Y=-26.556

土師器片・灰混

H=51.0m



- 1 10YR3/4暗褐色砂泥
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥
- 3 +2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥
- 7 10YR3/4暗褐色砂泥
- 8 10YR4/4褐色砂泥
- 9 10YR3/4暗褐色砂泥
- 10 10YR3/3暗褐色砂泥、灰含む
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 13 10YR2/2黒褐色砂泥
- 14 10YR3/4暗褐色砂泥
- 15 10YR3/3暗褐色砂泥
- 16 10YR2/2黒褐色砂泥～泥土、土師器片・灰混
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥+10YR2/2黒褐色砂泥
- 18 10YR2/3黒褐色砂泥～泥土、土師器片・灰混
- 19 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥に土師器片・灰混 [落込み83]
- 20 10YR2/2黒褐色砂泥が既に入る [落込み83]
- 21 10YR3/2黒褐色砂泥
- 22 10YR3/2黒褐色砂泥
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 [地山]
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 [地山]
- 25 10YR4/4褐色砂泥+粗砂 [地山]
- 26 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 [地山]
- 27 2.5Y5/3黄褐色粗砂 [地山]



図7 調査区断面図1 (1:50)

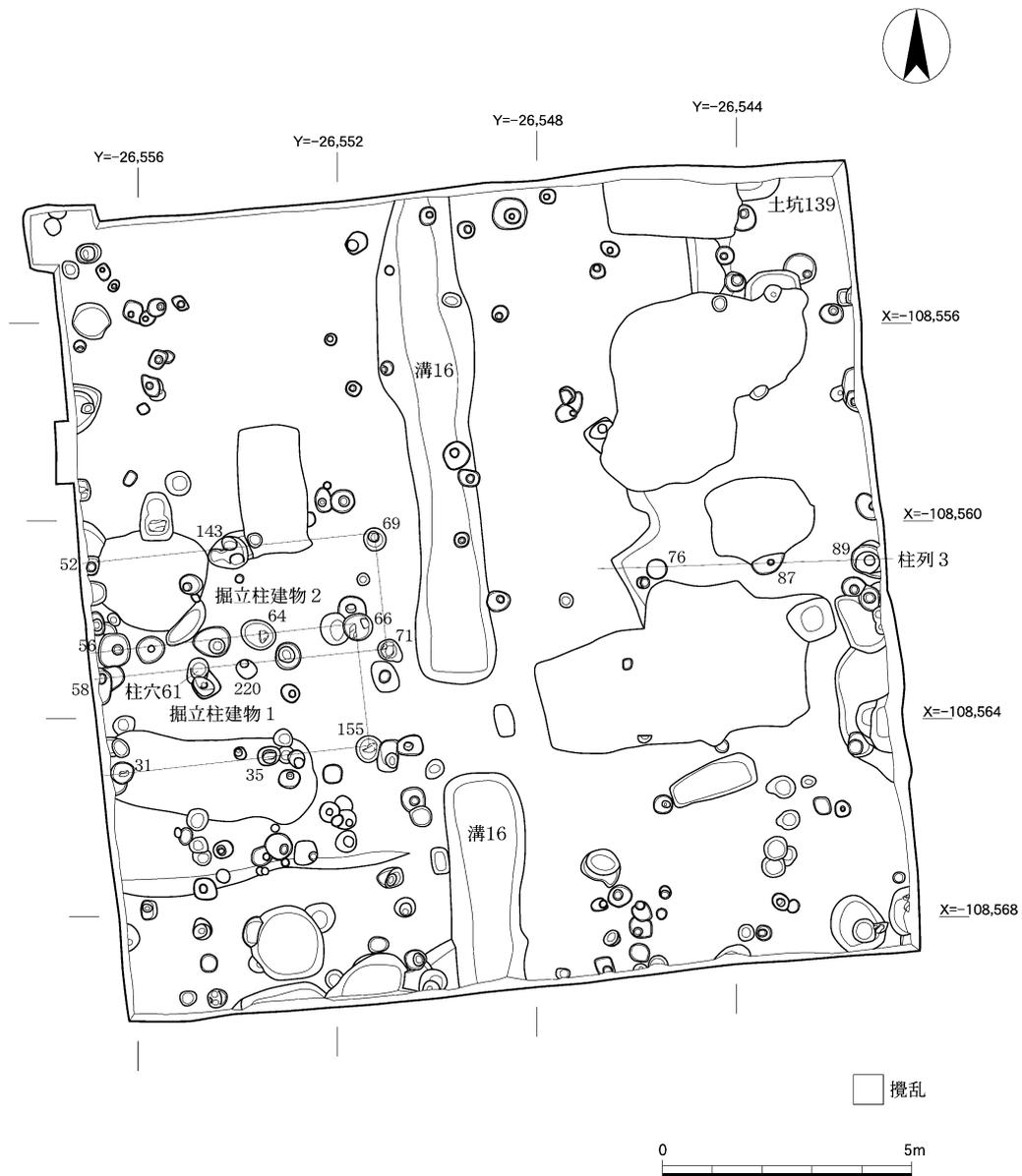


図9 第1-1面遺構平面図 (1:150)

m、深さ約0.4mある。柱間は桁行が約2.3mで、梁間が約2.4mある。主軸方向はN96°W振れる。柱穴52からは桃山時代の土器類、柱穴58からは江戸時代中期の国産磁器が出土している。出土遺物からは、掘立柱建物1が古いと考えられる。

溝16 調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝である。幅は1.3～2.0m、深さは約0.4mある。X=-108,564付近で底部が浅くなり、一旦途切れるが、本来は連続すると考えられる。埋土は黒褐色から暗褐色の泥砂を主体とする。江戸時代後期の土器・陶磁器類が出土した。

土坑139 調査区北東部に位置する。規模は、東西0.9m以上、南北0.4m以上、深さ約0.3mである。西半は攪乱、北半は調査区外となる。室町時代の土器類に混じって、平安時代後期の土

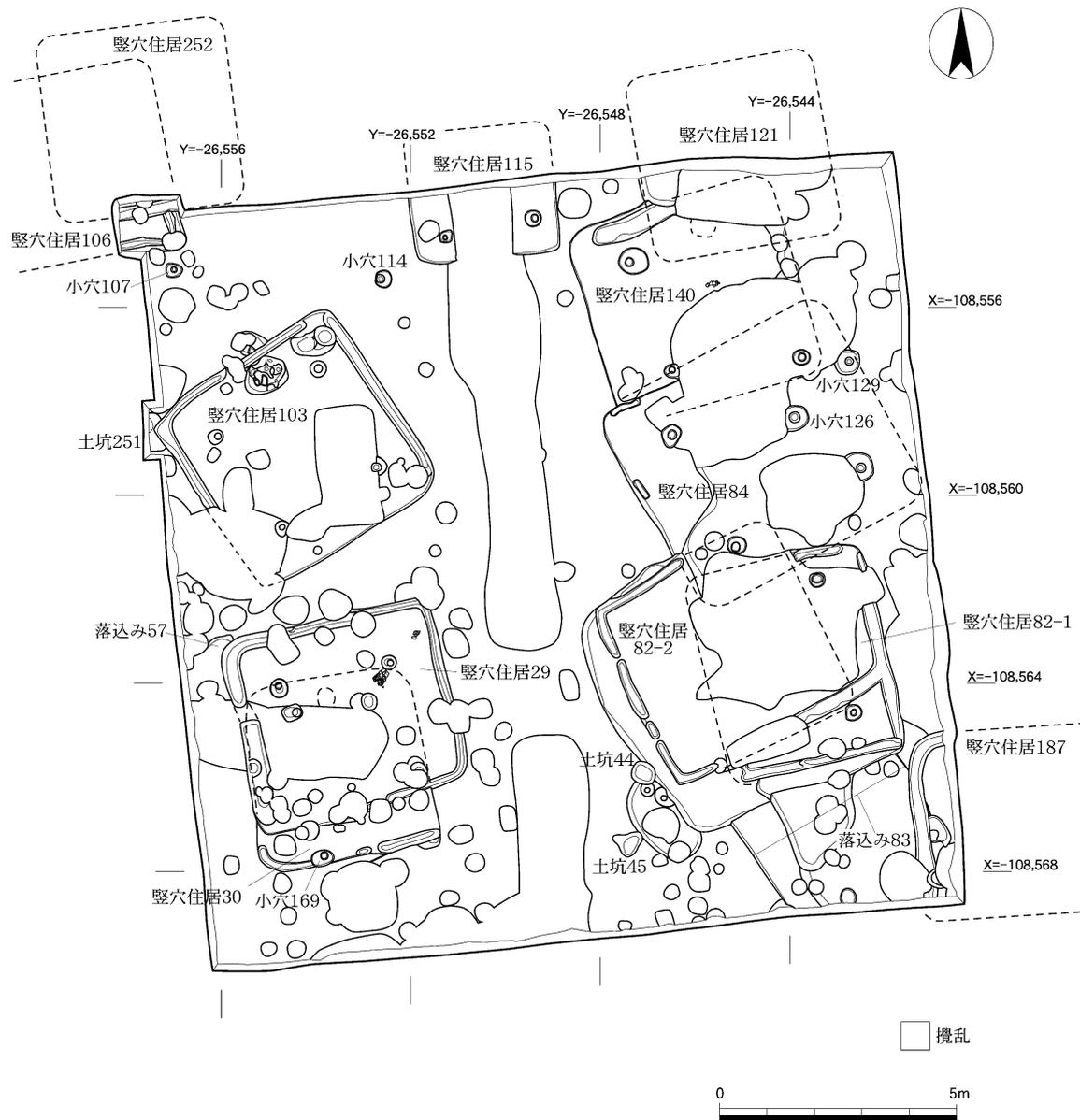
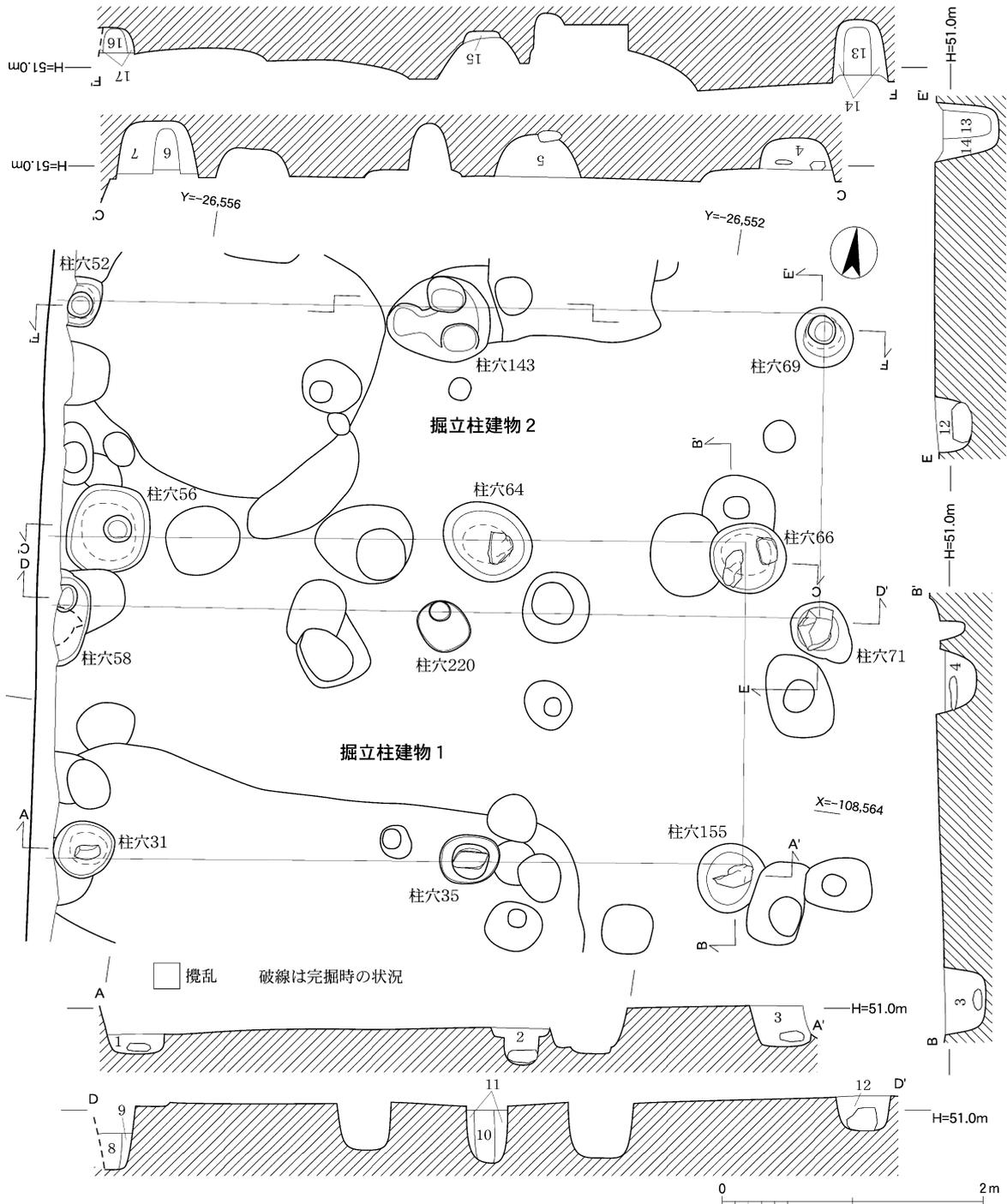


図10 第1-2面遺構平面図 (1:150)

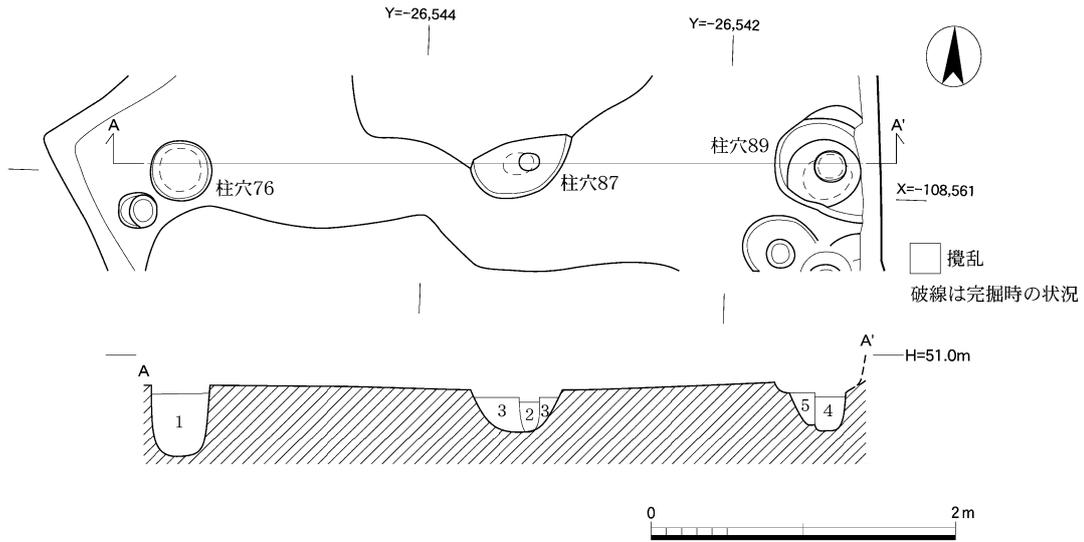
器が少量出土する。

柱穴群 (図12) 調査区全域で検出した柱穴は200基前後である。各柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、径0.3～0.7mある。建物としてはまとまらないが、柱列を確認できるものもある。一例として、柱列3は柱穴76－87－89からなる柱列で、柱間は約2.2mある。検出面での規模は、径0.4～0.6m、深さ約0.6mあり、主軸方向はN92°W振れる。遺物は、土師器・須恵器の小片が柱穴89から出土している。また、柱穴61からは、近世の遺物が出土している。各柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、径0.4～0.6m、深さ0.3～0.5mである。



- | | |
|---|--|
| <p>1 10YR3/3~4/2暗褐色~灰黄褐色泥土、10YR~2.5YR5/3にぶい黄褐色~黄褐色泥砂ごく少量混、礫径10cm以下少量混 [柱穴31埋土]</p> <p>2 同上 [柱穴35埋土]</p> <p>3 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR5/3~5/4にぶい黄褐色泥土少量混、礫径1cm以下ごく少量混 [柱穴155埋土]</p> <p>4 10YR3/2~3/3黒褐色~暗褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥ごく少量混、礫径1cm以下少量混 [柱穴66埋土]</p> <p>5 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/6褐色泥土少量混、礫径7cm以下混 [柱穴64埋土]</p> <p>6 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色泥砂少量混、礫ほとんどなし [柱穴56柱当]</p> <p>7 10YR4/4褐色砂泥~泥砂、10YR3/2黒褐色砂泥少量混、礫径1cm以下少量混 [柱穴56掘形]</p> <p>8 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥少量混、礫ほとんどなし [柱穴58柱当]</p> | <p>9 10YR3/2~3/3黒褐色~暗褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥少量混、礫径1cm以下少量混 [柱穴58掘形]</p> <p>10 10YR3/2~3/3黒褐色~暗褐色泥土、礫ほとんどなし [柱穴220柱当]</p> <p>11 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色泥土少量混、礫径3cm以下多量混 [柱穴220掘形]</p> <p>12 10YR3/3暗褐色砂泥~泥砂、10YR5/4にぶい黄褐色細砂混、礫径3cm以下中量混 [柱穴71埋土]</p> <p>13 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径3cm以下少量混 [柱穴69柱当]</p> <p>14 10YR3/3暗褐色砂泥~泥砂、10YR5/4にぶい黄褐色細砂混、礫径3cm以下中量混 [柱穴69掘形]</p> <p>15 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色泥土少量混、礫径1cm以下ごく少量混 [柱穴143埋土]</p> <p>16 10YR3/2黒褐色泥土、礫径0.5cm以下ごく少量混 [柱穴52柱当]</p> <p>17 10YR3/2~4/2黒褐色~灰黄褐色砂泥、礫径0.5cm以下ごく少量混 [柱穴52掘形]</p> |
|---|--|

図 11 掘立柱建物 1・2 実測図 (1:50)



- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 10YR2/2~3/2黒褐色砂泥、礫径4cm以下混【柱穴76】 | 4 10YR2/2黒褐色泥土、礫ほとんどなし【柱穴89柱当】 |
| 2 10YR2/2黒褐色泥土、礫ほとんどなし【柱穴87柱当】 | 5 10YR2/2~3/2黒褐色泥土、礫径4cm以下混【柱穴89掘形】 |
| 3 10YR2/2~3/2黒褐色泥土、礫径4cm以下混【柱穴87掘形】 | |

図12 柱列3実測図(1:50)

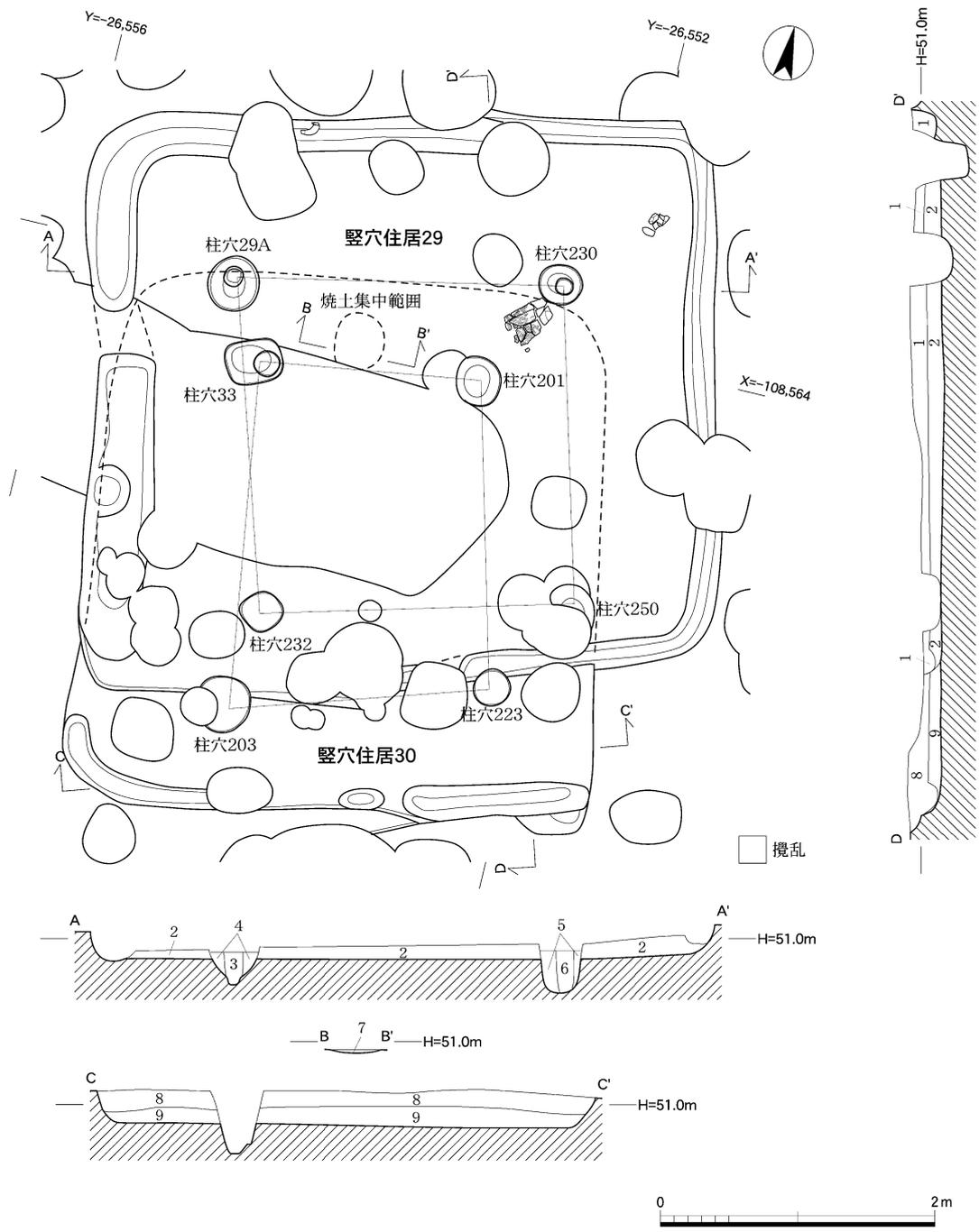
2) 第1-2面の遺構(図10、図版1-1)

主な遺構には、飛鳥時代の竪穴住居が12棟、落込み状遺構、小穴がある。その他、2基であるが縄文時代中期の土坑もある。

竪穴住居29(図13、図版1-2・2-1) 調査区南西部で検出した。平面形はほぼ方形を呈する。検出規模は南北約4.5m、東西約4.6m、深さ約0.2mであり、壁溝は3辺で検出した。支柱穴は4基検出し、柱間は約2.5mである。床面はほぼ全域で確認した。N14°Wの傾きをもつ。住居内からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土した。

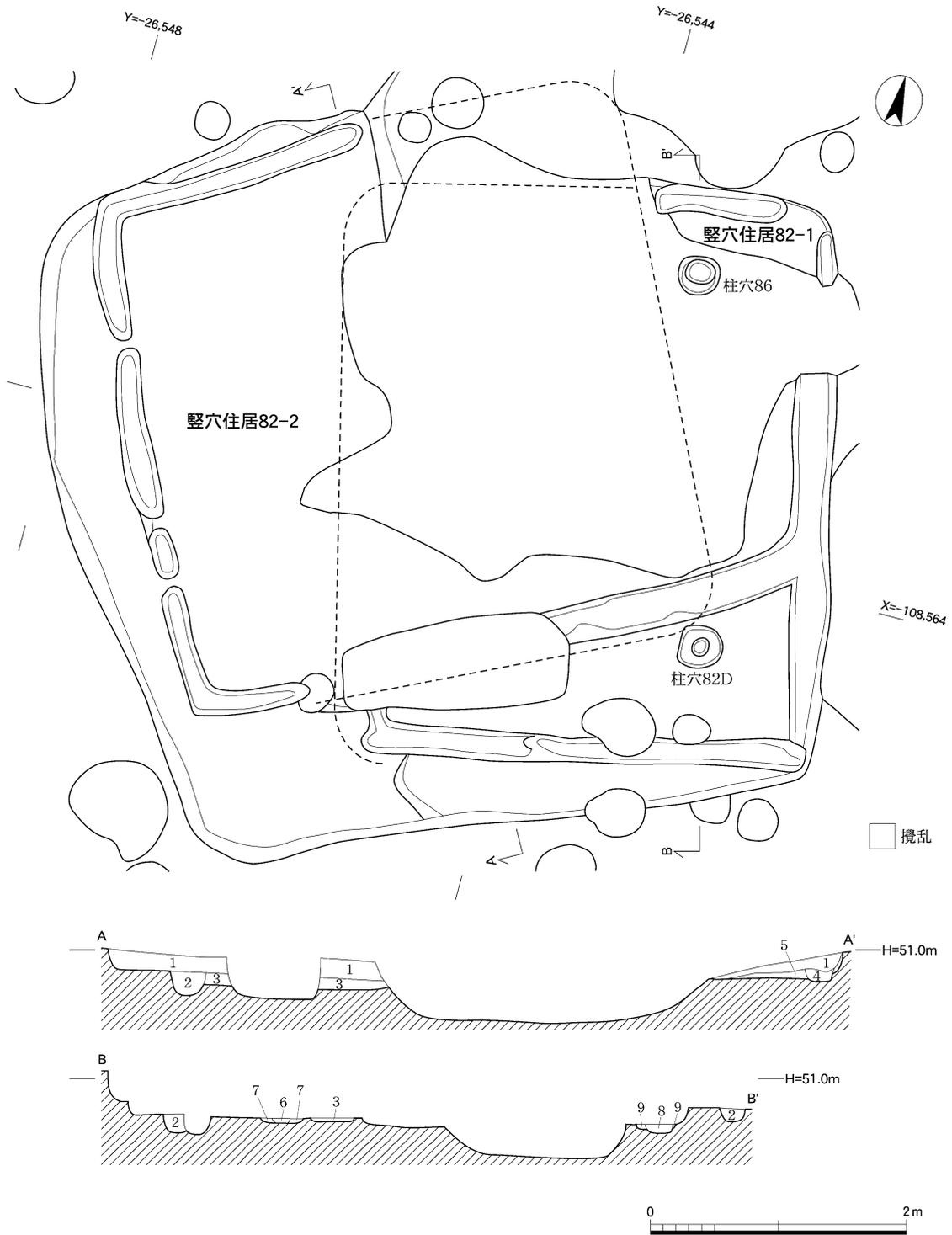
竪穴住居30(図13、図版2-2) 調査区南西部で検出した。竪穴住居29に北半を壊されており、平面形は不明だが、支柱穴の位置などから方形を呈すると考えられる。検出規模は南北約3.5m以上、東西約3.9m、深さ約0.3mである。壁溝は2辺で検出し、支柱穴は4基検出した。柱間は東西1.6m、南北2.5mである。床面は南部で確認した。北側のほぼ中央に竈痕跡とみられる焼土の集中部分を検出した。N14°Wの傾きをもつ。住居内からは土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕が出土した。切り合い状況から竪穴住居29より古い。

竪穴住居82(図14、図版4-2・5-1) 調査区南東部で重複した状態で2棟検出した。竪穴住居82-1は平面形は長方形を呈する。検出規模は南北約4.9m、東西約4.2m、深さ約0.35mである。壁溝は4辺で検出し、支柱穴は2基検出した。柱間は3.2mである。竈は確認できなかった。N15°Wの傾きをもつ。住居内からは土師器杯・甕、須恵器杯・高杯・甕が出土した。竪穴住居82-2は、平面形は方形を呈する。検出規模は南北約4.8m、東西約5.2mである。壁溝は3辺で検出した。竈および支柱穴は確認できなかった。N30°Wの傾きをもつ。住居内からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土した。切り合い状況から、竪穴住居82-1が新しい。



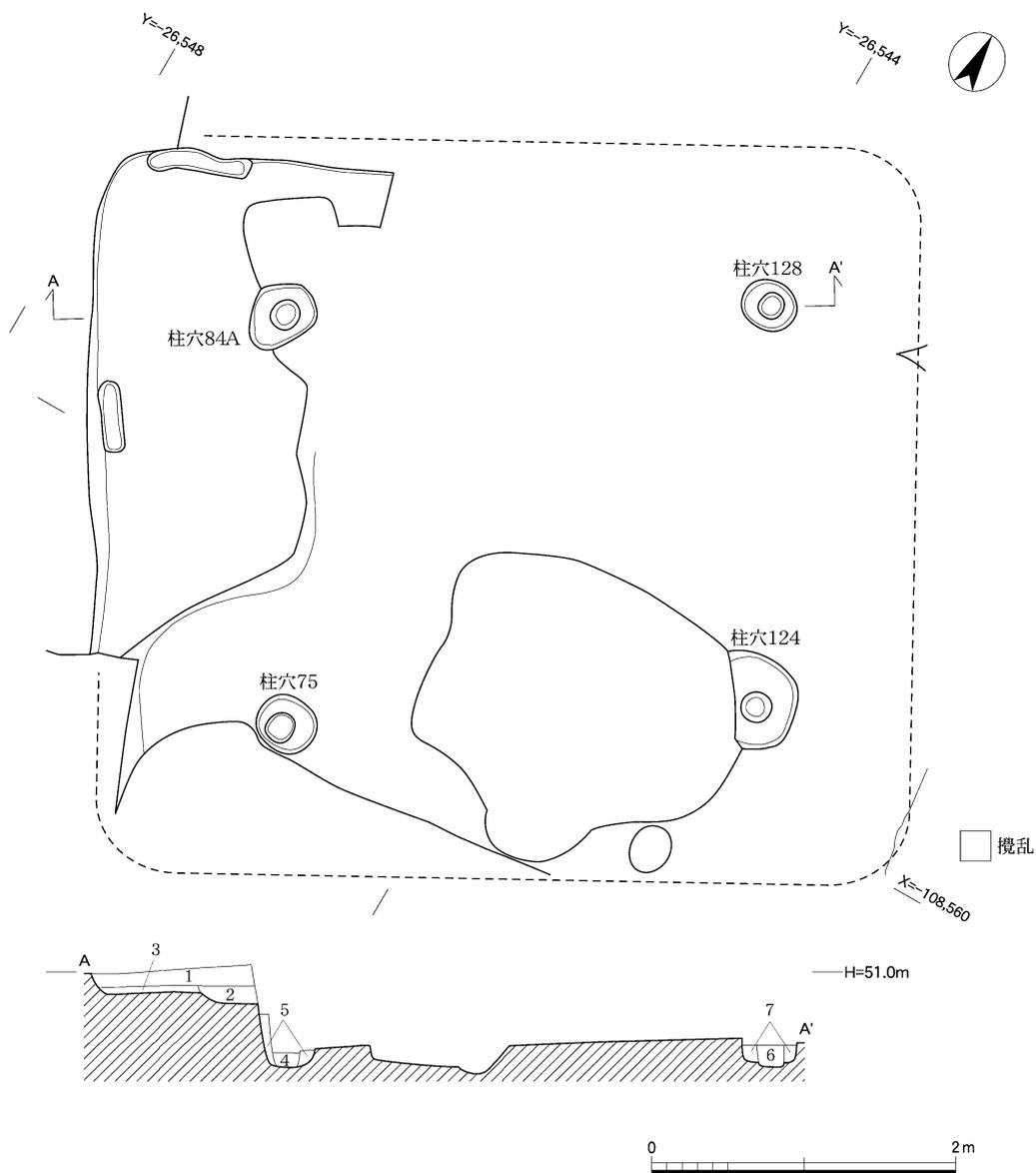
- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR3/2黒褐色砂泥～泥土、10YR4/3にぶい黄褐色シルトごく少量混、礫径4cm以下混【竪穴住居29埋土】</p> <p>2 10YR3/3～4/3暗褐色～にぶい黄褐色砂泥、10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥・10YR5/3～6/3にぶい黄橙色泥砂ブロック混、粗砂～小礫多量混【竪穴住居29床土】</p> <p>3 10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥、10YR～2.5Y5/4にぶい黄褐色～黄褐色シルト少量混、礫ほとんどなし【柱穴29A柱当】</p> <p>4 10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥、10YR～2.5Y5/4にぶい黄褐色～黄褐色シルト相互混入、礫径1cm以下少量混【柱穴29A掘形】</p> | <p>5 10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥、礫ほとんどなし【柱穴195柱当】</p> <p>6 10YR3/3～4/3暗褐色～にぶい黄褐色砂泥、10YR6/4にぶい黄橙色シルト同量混、礫径1cm以下少量混【柱穴195掘形】</p> <p>7 10YR3/4暗褐色砂泥、7.5YR5/6～5/8明褐色砂泥多量混、炭微量混【焼土集中範囲】</p> <p>8 10YR3/2黒褐色泥砂～砂泥、10YR3/3にぶい黄褐色シルトごく少量、礫径5cm以下混【竪穴住居30埋土】</p> <p>9 10YR5/3～6/3にぶい黄褐色～にぶい黄橙色泥砂、10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥ブロック少量混、礫径1cm以下少量混【竪穴住居30床土】</p> |
|---|---|

図 13 竪穴住居 29・30 実測図 (1 : 50)



- | | |
|--|--|
| <p>1 10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色シルトごく少量混、礫径10cm以下（1cm以下主）少量混（おそらく複数の攪乱と住居埋土・床土が混在しているもの、分層時には全体でひとつの住居と考えていたため区分できず）</p> <p>2 10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色泥土、10YR5/3にぶい黄褐色泥土少量混（場所により主客逆転）、礫径3cm以下ごく少量混【竪穴住居82-1壁溝】</p> <p>3 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色シルト少量混、下半に10YR5/4にぶい黄褐色砂礫多量混【竪穴住居82-1床土】</p> | <p>4 10YR3/2黒褐色泥土、10YR4/4褐色シルトごく少量混、礫径2cm以下少量混【竪穴住居82-2壁溝】</p> <p>5 10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色砂泥～泥土、礫径10cm以上がごく少数混、他は礫ほとんどなし【竪穴住居82-2床土】</p> <p>6 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径1cm以下少量混【柱穴82D柱当】</p> <p>7 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色シルト中量混、礫径1cm以下少量混【柱穴82D掘形】</p> <p>8 10YR2/2黒褐色砂泥、礫ほとんどなし【柱穴86柱当】</p> <p>9 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径1cm以下少量混【柱穴86掘形】</p> |
|--|--|

図14 竪穴住居82実測図（1：50）



- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR2/2黒褐色～3/3暗褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥ごく少量混、礫径10cm以下（1cm以下主）少量混
[埋土]</p> <p>2 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR7/2にぶい黄橙色砂泥ごく少量混、礫ほとんどなし [床土]</p> <p>3 10YR2/2黒褐色砂泥、10YR7/2にぶい黄橙色砂泥多量混、礫ほとんどなし [床土]</p> | <p>4 10YR3/3暗褐色砂泥、礫ほとんどなし [柱穴84A柱当]</p> <p>5 10YR2/2～2/3黒褐色砂泥、礫径4cm以下多量混 [柱穴84A掘形]</p> <p>6 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥、礫径3cm以下少量混 [柱穴128柱当]</p> <p>7 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥少量混、礫径3cm以下混 [柱穴128掘形]</p> |
|--|---|

図 15 竪穴住居 84 実測図 (1 : 50)

竪穴住居 84 (図 15、図版 4- 2) 調査区東側で検出した。東半を攪乱され、平面形は不明だが主柱穴の位置などから、ほぼ方形を呈すると考えられる。検出規模は南北 4.1 m 以上、東西 4.7 m 以上、深さ約 0.25 m である。壁溝は 2 辺で検出し、主柱穴は 4 基検出した。柱間は東西 3.2 m、南北 2.7 m である。竈は確認できなかった。N30° W の傾きをもつ。住居内からは土師器高杯・甕、須恵器杯が出土した。また、弥生土器壺 (6) も床整地層から混入遺物として出土している。

竪穴住居 103(図 16、図版 1-2・3-1) 調査区北西部で検出した。平面形はほぼ方形を呈する。検出規模は南北約 4.5 m、東西約 4.6 m、深さ約 0.15 m であり、壁溝は 3 辺で検出した。北辺のほぼ中央に竈痕跡を検出した。長辺 1.0 m・短辺 0.8 m の楕円形を呈し、深さは約 0.25 m である。竈の東には貯蔵穴がある。長辺 1.0 m・短辺 0.6 m の楕円形を呈し、深さは約 0.3 m である。支柱穴は 4 基検出し、柱間は約 2.5 m である。N34° W の傾きをもつ。住居内からは土師器杯・甕が出土した。住居の外側で、竈の北側壁溝に接して東西約 1.0 m、南北 1.3 m 以上、深さ約 0.15 m の土坑 235 を検出した。この土坑内南側には径約 0.6 m で、深さ約 0.1 m の赤く変色した部分がある。強い熱を受けた部分とみられることから、煙道の一部と考えられる。

竪穴住居 106 (図 20、図版 5-2) 調査区北西隅で検出した。住居南東隅部分のみの検出で、大半は調査区外に広がるため平面形は不明である。検出規模は南北約 1.2 m 以上、東西 1.4 m 以上、深さ約 0.15 m であり、壁溝は 2 辺で検出した。調査区を拡張したが、南東隅に位置する支柱穴は検出できなかった。N10° W の傾きを持つものと考えられる。住居内からは土師器杯・甕、須恵器甕が出土した。調査区の拡張後に、竪穴住居 252 に切られていることが判明した。

竪穴住居 115(図版 3-2) 調査区北側で検出した。北半は調査区外に延び、平面形は不明である。検出規模は南北 1.1 m 以上、東西約 3.2 m、深さ約 0.25 m である。壁溝は 2 辺で検出し、支柱穴は 2 基検出した。柱間は 2.3 m で、小型の住居である。N10° W の傾きをもつ。住居内からは土師器杯が出土した。

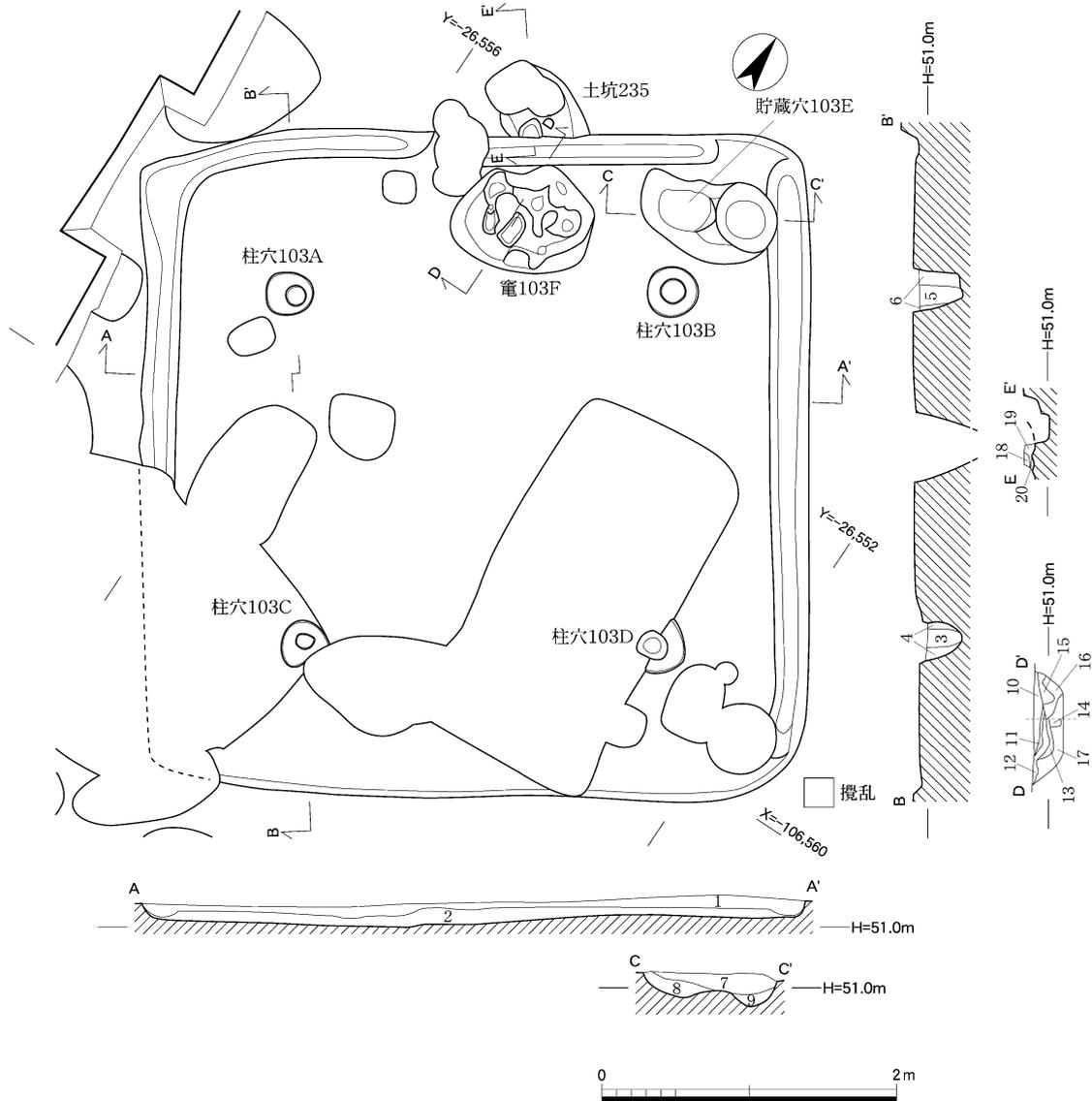
竪穴住居 121 (図 17・18) 調査区北東部で検出した。住居の南西部のみの検出で、北半は調査区外に広がる。検出規模は南北 1.9 m 以上、東西 2.3 m 以上、深さ約 0.15 m である。壁溝は 2 辺で検出し、支柱穴は 1 基のみ検出した。N20° W の傾きをもつ。住居内からは土師器甕、須恵器杯・甕が出土した。

竪穴住居 140 (図 17、図版 4-1) 調査区北東部で検出した。住居の西部のみの検出で、大半は攪乱により失われている。検出規模は南北約 4.1 m、東西 5.1 m 以上、深さ約 0.15 m で、壁溝は 2 辺で検出した。支柱穴は 2 基のみ検出し、柱間は約 2.5 m である。竈は確認できなかった。N20° W の傾きをもつ。住居内からは土師器甕、須恵器杯・甕が出土した。切り合い状況から、竪穴住居 121 より新しい。

竪穴住居 187 (図 19) 調査区南東部で検出した。平面形は方形を呈すると考えられる。大半は調査区外に広がる。検出規模は南北 3.8 m 以上、東西 0.9 m 以上で、壁溝は 2 辺で検出した。N5° W の傾きをもつ。

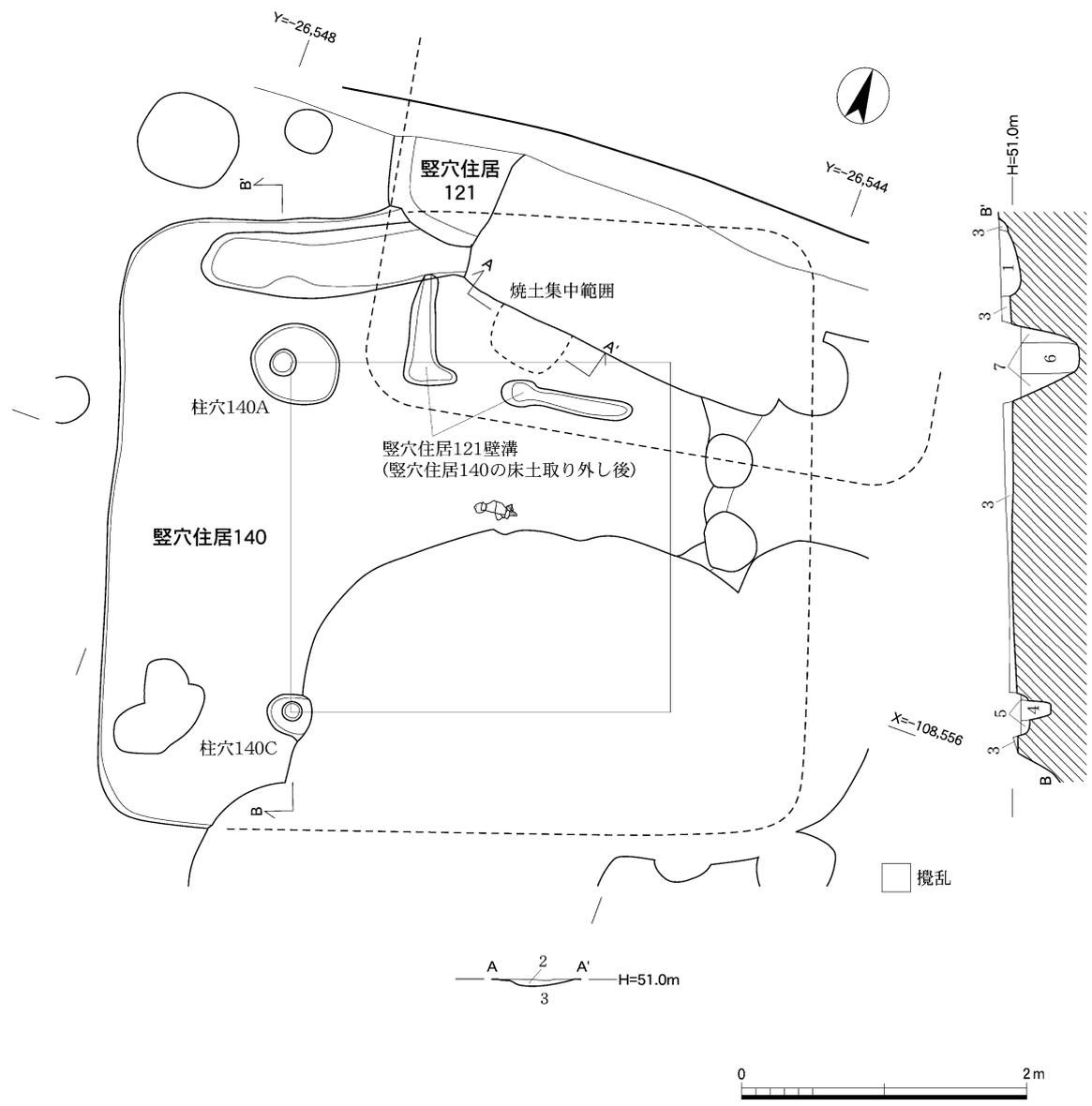
竪穴住居 252 (図 20) 北西隅の拡張区で検出した。平面形は不明である。大半は調査区外に広がる。検出規模は東西 1.3 m 以上、南北 0.4 m 以上、深さ約 0.15 m ある。壁溝は 1 辺で検出した。N10° W の傾きをもつ。切り合い状況から、竪穴住居 106 より新しい。

落込み 57 調査区南西部で検出した。西側は調査区外に広がり、南側は竪穴住居 29・30 により削平されているため平面形は不明である。検出規模は南北 1.5 m 以上、東西 1.3 m 以上、深さ約 0.1 m である。西壁の X=-108,564 地点で溝を確認しているが、壁溝の可能性もあるが、平面では確



- | | |
|---|--|
| <p>1 10YR2/2~3/2黒褐色・3/3暗褐色シルト、10YR5/3~5/4にぶい黄褐色シルト少量混、礫径3cm以下少量混 [埋土]</p> <p>2 10YR4/4褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥少量混、礫少量混 [床土]</p> <p>3 10YR3/4暗褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥少量混、礫径1cm以下中量混 [柱穴103C柱当]</p> <p>4 10YR2/2~3/3黒褐色~暗褐色シルト、10YR5/3にぶい黄褐色シルトごく少量混、礫ほとんどなし [柱穴103C掘形]</p> <p>5 10YR2/2~3/3黒褐色~暗褐色シルト、10YR4/3にぶい黄褐色シルトごく少量混、礫ほとんどなし [柱穴103A柱当]</p> <p>6 10YR4/3~5/3にぶい黄褐色シルト、10YR2/2~3/3黒褐色~暗褐色シルト中量混、礫ほとんどなし [柱穴103A掘形]</p> <p>7 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混 [貯蔵穴103E]</p> <p>8 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR4/3にぶい黄褐色シルト多量混 [貯蔵穴103E]</p> <p>9 10YR3/4暗褐色砂泥、10YR4/3にぶい黄褐色シルト多量混 [貯蔵穴103E]</p> | <p>10 10YR3/3暗褐色砂泥、炭少量混、5mmほどの焼土ブロック少量混 [竈103F]</p> <p>11 10YR5/6明褐色砂泥 (焼土) [竈103F]</p> <p>12 10YR4/4褐色砂泥、炭微量混 [竈103F]</p> <p>13 7.5YR4/4褐色砂泥 (焼土) [竈103F]</p> <p>14 7.5YR4/3~4/4褐色砂泥 (焼土) [竈103F]</p> <p>15 10YR2/3黒褐色砂泥、炭微量混 [竈103F]</p> <p>16 10YR3/3暗褐色砂泥 [竈103F]</p> <p>17 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 [竈103F]</p> <p>18 10YR3/4褐色シルト (熱を受けて変色か?) [土坑235]</p> <p>19 10YR3/3暗褐色砂泥 [土坑235]</p> <p>20 10YR2/3黒褐色砂泥 [土坑235]</p> |
|---|--|

図 16 竪穴住居 103 実測図 (1 : 50)



- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色砂泥、礫径5cm以下少量混
[竪穴住居140壁溝]</p> <p>2 7.5YR4/4褐色泥土 [焼土集中範囲]</p> <p>3 10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色砂泥、2.5Y5/2暗灰黄色泥
土多量混、礫径5cm以下少量混 [竪穴住居140床土]</p> | <p>4 10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色砂泥 [柱穴140C柱当]</p> <p>5 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径4cm以下多量混 [柱穴140C
掘形]</p> <p>6 10YR3/3暗褐色砂泥 [柱穴140A柱当]</p> <p>7 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥まだ
らに混、礫径3cm以下少量混 [柱穴140A掘形]</p> |
|--|---|

図 17 竪穴住居 121・140 実測図 (1 : 50)



図 18 竖穴住居 121 (南から)



図 19 竖穴住居 187 (西から)



図 20 竖穴住居 106・252 (北から)

認できていない。遺構内からは土師器杯・甕が出土した。

落込み 83 調査区南東部で検出した。北側と南側を攪乱されているため平面形は不明である。検出規模は南北 3.0 m 以上、東西約 3.8 m、深さ約 0.2 m である。落込み内の東面や西面では、壁溝は検出できていない。東側では、焼土範囲を確認しており竈の可能性はある。遺構内からは土師器甕、須恵器杯・甕が出土した。

小穴 107 調査区の北西隅で検出した小穴である。平面形はやや歪な楕円形を呈する。径は約 0.4 m、深さ約 0.2 m。埋土から須恵器杯 H 蓋 (8) が出土した。

小穴 114 調査区の北西部で検出した小穴である。平面形は円形を呈する。径は約 0.4 m、深さ約 0.2 m。埋土から土師器甕・須恵器杯 H 蓋片 (12) が出土した。

小穴 126 調査区の北東部で検出した小穴である。西側を攪乱により失うが、平面形は円形を呈する。径は約 0.5 m、深さ約 0.4 m。埋土から土師器甕・高杯 (27) が出土した。

土坑 251 西側の拡張区で検出した土坑である。大半は調査区外西に広がる。南北 0.8 m 以上、東西 0.3 m 以上、深さ約 0.2 m。埋土から土師器甕 (30) が出土した。

小穴 129 調査区の北東部で検出した小穴である。平面形は円形を呈する。径は約 0.5 m、

深さ約 0.4 m。埋土から土師器甕と弥生土器壺 (7) が出土した。弥生土器は混入遺物とみられる。

土坑 44 調査区南部で検出した。平面形はやや楕円形で、長径約 0.6 m、深さ約 0.3 m である。縄文土器 (1～3) が出土した。

土坑 45 調査区南部で検出した。平面形は不定形である。直径約 0.7 m、深さ約 0.2 m。縄文土器片が出土した。

4. 遺 物

(1) 出土遺物の概要

遺物は、整理箱に13箱出土した。遺物内容は、土器類がほとんどを占め、瓦類は少量にとどまる。遺物は各遺構から出土したが、大半は細片であり、図示できるものは少ない。

縄文時代の遺物は、おもに調査区南部の土坑44・45から出土した。他に、小破片が竪穴住居など後世の遺構などから混入遺物として少量出土した。

弥生時代の遺物は、すべて後世の遺構埋土から少量出土した。当該期の遺構に伴って出土したものではない。壺頸部がある。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺物は、竪穴住居29・82・103などや小穴107・169などから出土した。土師器・須恵器がある。この時期に属する遺物が最も多く出土しているが、細片が多く、図示できるものは一部である。

平安時代から鎌倉時代の遺物は、後世の遺構埋土から少量出土した。土師器杯、瓦類がある。土師器杯はいずれも小片のため図示できないが、平安時代中期に属する。瓦は平瓦があり、凹面に布目圧痕を残すものと、ハナレ砂を施すものがある。

室町時代以降の遺物は、掘立柱建物1・2、土坑139、溝16、柱穴などから出土した。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・国産磁器などがある。

(2) 縄文時代の遺物 (図21、図版6)

縄文時代の遺物には、中期のものと晩期に属するものがある。

縄文土器(1～5) 1～3は土坑44、4は竪穴住居106、5は竪穴住居103から出土した。

1は深鉢A類の大きく外反する口縁部である。口縁下に隆帯を貼り付け、その上部に竹管状工

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器5点		
弥生時代	弥生土器		弥生土器2点		
古墳時代後期 ～飛鳥時代	土師器、須恵器		土師器11点、須恵器17点		
室町時代以降	土師器、瓦器、施釉陶器、 焼締陶器、国産磁器		土師器7点、瓦器2点、磁器1点		
合 計		15箱	45点(2箱)	0箱	13箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。



図 21 出土土器実測図（1：4）縄文・弥生時代

具による斜め方向の刺突を施す。隆帯直下に竹管状工具を使用した半輪状の沈線を引き、半輪の内側を丁寧になでる。口縁端部外面から隆帯、隆帯直下から胴部にかけては、LR縄文を充填施文する。内面はナデ調整である。口径 26.3 cmを測る。2は深鉢C類で、山形の口縁波頂部と胴部片である。接合点がないため、器形と文様から復元的に図を作成している。波頂部口縁は逆「く」の字に内屈し、波頂部より少し下がった位置ではL字に内屈する。外面は縦長の渦巻き文を横方向に連続的に配置し、文様間をLR縄文で充填する。ただし、この縄文施文は胴部下半で行われており、口縁端部付近では確認できない。L字に内屈させた口縁部には区画文を沈線で描き、区画外を縄文施文する。また、波頂部に径約 1 cmの円形押圧文を施し、周辺に縄文を施す。3は底径 6.8 cmの平底である。底部から少し立ち上がって、胴部にかけて緩やかに外反する。内外面をナデとオサエで調整する。4は深鉢A類の口縁部下部片とみられる。楕円形の区画文内に羽状沈線を施す。楕円文は竹管状工具による押し引き沈線である。5は突帯文土器の口縁部である。口縁外面直下に突帯を貼り付け、

小D字の刻目を施す。内外面はナデ調整である。

1～4は縄文時代中期末の北白川C式土器、5は縄文時代晩期末の長原式である。

（3）弥生時代の遺物（図 21、図版 6）

弥生時代の遺物には、弥生土器がある。当該期の遺構に伴わない混入遺物である。

弥生土器（6・7） 6・7は広口壺である。6の口縁部は外反する。端部は上下方に肥厚して面をもち、2条の凹線を巡らせる。竪穴住居 84 出土。7の口縁部は外反する。端部は上方に肥厚して面をもつ。小穴 129 出土。

(4) 古墳時代後期から飛鳥時代の遺物 (図 22、図版 7)

古墳時代後期から飛鳥時代の遺物には、土師器・須恵器がある。土師器には椀・杯・高杯・壺・甕がある。須恵器には杯身・杯蓋・高杯・甕などがある。

竪穴住居 29 出土土器 (11・15～17・21・26・35) 土師器椀・壺、須恵器杯・甕がある。26・35 は土師器である。26 は椀で、内面に放射状暗文を施し、外面は口縁部をナデ、底部をオサエで調整する。7 世紀中頃に位置するものと考えられる。35 は体部が球体状の壺底部とみられる。15～17・21 は須恵器杯 H 身である。15・17 は短い立ち上がりを受け部をもつ。16 は口縁部立ち上がりが内傾し、受け部端部は丸く収める。21 は、底部はヘラケズリを施し、体部から口縁部はナデを施す。口縁立ち上がりはやや高く、内傾しながら上方に延びる。直径 19 cm を越える大型品である。11 は須恵器杯 H 蓋で、口縁部を下方に折り曲げて整形し、端部をやや開き気味にして丸く収める。柱穴 230 出土。

竪穴住居 82-1 出土土器 (13・18・23・29) 土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕がある。29 は土師器高杯である。杯部が欠損するが椀形の杯部が付くとみられる。脚部内面に絞り目がつき、外面はナデ調整と見られる。13・18・23 は須恵器である。13 は杯 B 蓋である。蓋の返りは短く、口縁端部は丸く収める。18・23 は杯 H 身である。ともに口縁部立ち上がりは低く斜め内側に延びて端部は丸く収める。体部の形状は、18 は直線的で、23 は緩やかに内弯する。

竪穴住居 82-2 出土土器 (9・10・31) 土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。31 は土師器甕である。口縁部は体部から「く」の字状に外反する。端部は上方をつまみ上げる。体部は球体を呈すると考えられる。9・10 は須恵器杯 H 蓋である。ともに口縁部は斜め下方に延びて端部は丸く収める。内外面ともにヨコナデを施す。9 は口径約 13 cm とみられる。

竪穴住居 84 出土土器 (28・34) 土師器高杯・甕、須恵器杯がある。28 は土師器高杯の脚部の上方部片である。器表の剥離が激しいため、調整方法は観察できない。34 は土師器甕もしくは甕の把手部で、体部に三角形の把手を貼り付ける。須恵器は小片のため図示できなかった。

竪穴住居 121 出土土器 (14・22) 土師器甕、須恵器杯・甕がある。14・22 は須恵器である。14 は杯 B 蓋である。天井部の宝珠摘みの上面は平坦気味である。22 は杯 H 身である。口縁部立ち上がりは低く斜め内側に延びて端部は丸く収める。

竪穴住居 140 出土土器 (20・33) 土師器甕、須恵器杯・甕がある。33 は土師器甕の体部から口縁部にかけての破片で、「く」の字形で外反する口縁部がつく。内外面をハケ目調整する。20 は須恵器杯 H 身である。口縁部立ち上がりは低く斜め内側に延びて端部は丸く収める。

竪穴住居 30 出土土器 (19) 土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕がある。19 は須恵器杯 H 身である。口縁部立ち上がりは低く斜め内側に延びて端部は丸く収める。

落込み 57 出土土器 (32) 土師器甕、須恵器杯・甕がある。32 は土師器甕である。頸部から口縁部が内弯気味に立ち上がる。端部は丸みをもって収める。内外面はハケ目調整。長胴の体部をもつとみられる。

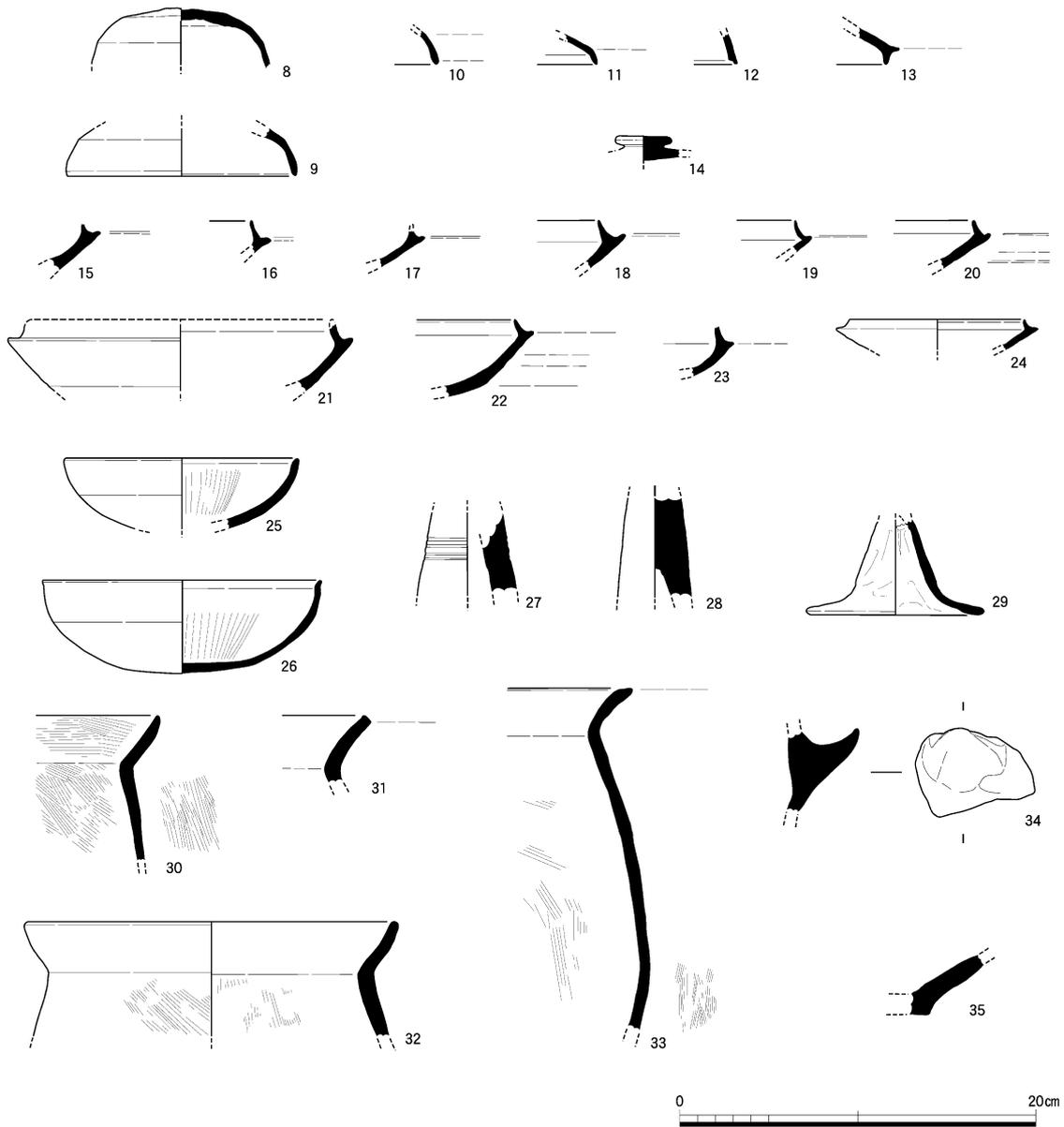


図 22 出土土器実測図（1：4）古墳時代から飛鳥時代

落込み 83 出土土器（24） 土師器甕、須恵器杯・甕がある。24 は須恵器杯 H 身である。口縁部立ち上がりは低く斜め内側に延びて端部は丸く収める。

その他の遺構出土土器（8・12・25・27・30） 土師器碗・杯・高杯・甕、須恵器杯・高杯・甕がある。25・27・30 は土師器である。25 は碗で、内面に放射状暗文を施し、外面は口縁部をナデ、底部をオサエで調整する。7 世紀前半に位置するものと考えられる。小穴 169 出土。27 は高杯脚部である。凹線を二重に巡らす。小穴 126 出土。30 は甕である。頸部から口縁部が内弯気味に立ち上がる。端部は丸みをもって収める。内外面はハケ目調整。長胴の体部をもつとみられる。土坑 251 出土。8・12 は須恵器杯 H 蓋である。8 の天井部は高さがあり、丸みを帯びる。小穴 107 出土。12 も口縁端部のみの出土である。端部内側に凹線をもつ。小穴 114 出土。

(5) 室町時代以降の遺物 (図 23、図版 7)

室町時代以降の遺物には、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・国産磁器・金属製品などがある。

土坑 139 出土土器 (36 ~ 39) 土師器皿、瓦器鍋・釜がある。36・37 は土師器皿である。36 の体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部付近でやや外反する。端部は上方につまみ上げて丸く収める。体部外面はオサエ、口縁部と内面はナデを施す。37 の体部はやや外反気味に立ち上がり、端部は上方につまみ上げて丸く収める。体部外面はオサエ、口縁部と内面はナデを施す。器壁が薄い。京都Ⅷ期中～¹⁾新。38・39 は瓦器である。38 は鍋で、口縁部は

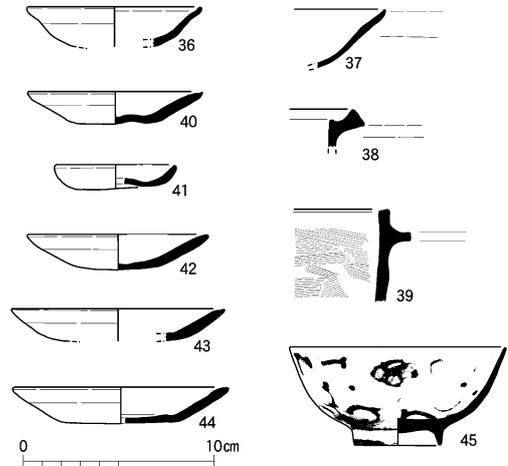


図 23 出土土器実測図 (1 : 4) 室町時代以降

上方をへこませ蓋の受け部を作る。体部外面は形成時の指頭圧痕が明瞭で凹凸がある。外面には煤が付着する。39 は釜である。直立する体部に鐳を貼り付け、口縁端部は平坦な端部をもつ。体部外面の調整は指オサエで、内面はハケ目である。京都Ⅷ期である。

溝 16 出土土器 (41・44) 41・44 は土師器皿である。41 の体部はやや内傾して立ち上がり、口縁部は丸く収める。底部は上方にやや窪む。44 は平坦な底部から体部は外方に直線的に立ち上がる。端部は上に面をもつ。内面底部には、幅が広く浅い圏線が巡る。京都Ⅹ期新。

その他の遺構出土土器 (40・42・43・45) 土師器皿、磁器碗がある。40・42・43 は土師器皿である。40 の体部はやや外反気味に開く。底部は上方にやや窪む。柱穴 66 (掘立柱建物 1) 出土。42 は丸みのある底部から体部は外方に直線的に立ち上がる。柱穴 61 出土。43 は平坦な底部から体部は外方に直線的に立ち上がる。端部は上に面をもつ。内面底部には圏線が巡る。柱穴 52 (掘立柱建物 2) 出土。40 は京都Ⅹ期中。42・43 は京都Ⅹ期新。45 は肥前磁器碗である。外面には呉須で草花文を施し、内面底部には圏線の中に草花文を施す。柱穴 58 (掘立柱建物 2) 出土。18 世紀前半。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996 年。土師器皿の時期表記は、これ以下も、この文献による。

掲載土器観察表

番号	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	備考
1	縄文土器	深鉢	土坑44	26.3	(9.8)		粗、石英・長石・チャート含む	良	10YR7/6明黄褐色	
2	縄文土器	深鉢	土坑44		(17.7)		やや良、チャート多量含む	良くない	7.5YR5/4にぶい褐色、7.5YR4/2灰褐色	
3	縄文土器	深鉢	土坑44		(5.5)	6.8	砂粒少量含む	良好	5YR7/6橙色	底部
4	縄文土器	深鉢	竪穴住居106		(3.7)		やや良、石英・チャート含む	やや良	10YR6/3にぶい黄褐色	
5	縄文土器	深鉢	竪穴住居103		(4.7)		やや粗、石英・長石・チャート含む	良	7.5YR6/6橙色	
6	弥生土器	壺	竪穴住居84	14.8	(6.1)		砂粒含む	良好	10YR7/2にぶい黄褐色	口径残存25%
7	弥生土器	壺	小穴129		(2.7)		砂粒含む	良好	5Y8/2灰白色	
8	須恵器	杯蓋	小穴107		(3.5)		緻密	良好	7.5Y7/1灰白色	
9	須恵器	杯蓋	竪穴住居82-2	13.0	(2.7)		緻密	良好	5PB7/1明青灰色	口径残存15%
10	須恵器	杯蓋	竪穴住居82-2		(1.9)		緻密	良好	10Y7/1灰色	
11	須恵器	杯蓋	柱穴230：竪穴住居29		(1.8)		緻密	良好	5B7/1明青灰色	
12	須恵器	杯蓋	小穴114		(1.2)		緻密	良好	5B5/1青灰色	
13	須恵器	杯蓋	竪穴住居82-1		(2.1)		緻密	良好	5B5/1青灰色	
14	須恵器	杯蓋	竪穴住居121		(1.4)		緻密	良好	5B7/1明青灰色	摘みあり
15	須恵器	杯	竪穴住居29		(2.6)		緻密	良好	5Y6/1灰色	
16	須恵器	杯	竪穴住居29		(1.9)		緻密	良好	2.5YR7/1橙色	
17	須恵器	杯	竪穴住居29		(2.1)		緻密	やや軟質	10YR7/3にぶい黄褐色	
18	須恵器	杯	竪穴住居82-1		(2.8)		砂粒少量含む	良好	5B5/1青灰色	
19	須恵器	杯	竪穴住居30		(1.8)		緻密	良好	5Y7/1灰白色	口径残存15%
20	須恵器	杯	竪穴住居140		(2.7)		緻密	やや軟質	5Y8/2灰白色	
21	須恵器	杯	竪穴住居29	19.4	(3.8)		砂粒少量含む	良好	7.5Y6/1灰色	口径残存15%
22	須恵器	杯	竪穴住居121		(4.4)		緻密	やや軟質	5Y8/2灰白色	
23	須恵器	杯	竪穴住居82-1		(2.8)		緻密	良好	5Y7/1灰白色	
24	須恵器	杯	落込み83	11.4	(1.7)		緻密	良好	5Y8/1灰色	口径残存20%
25	土師器	椀	小穴169	13.2	(4.0)		緻密	良好	2.5YR6/8橙色	口径残存15%
26	土師器	椀	竪穴住居29	15.7	5.3		砂粒少量含む	良好	5YR6/6橙色	口径残存50%
27	土師器	高杯	小穴126		(4.7)		砂粒少量含む	良好	5Y8/2灰白色	
28	土師器	高杯	竪穴住居84		(5.6)		緻密	良好	5YR6/6橙色	脚部
29	土師器	高杯	竪穴住居82-1		(5.4)	10.0	緻密	良好	5YR6/6橙色	底部残存20%
30	土師器	甕	土坑251		(8.2)		砂粒少量含む	良好	7.5YR8/3浅黄褐色	
31	土師器	甕	竪穴住居82-2		(3.8)		砂粒少量含む	良好	5YR6/6橙色	
32	土師器	甕	落込み57	21.0	(6.5)		砂粒少量含む	良好	7.5YR6/4にぶい橙色	口径残存20%
33	土師器	甕	竪穴住居140		(19.4)		砂粒少量含む	良好	2.5YR7/4にぶい橙色	
34	土師器	甕	竪穴住居84				砂粒少量含む	良好	10YR7/3にぶい黄褐色	把手部
35	土師器	壺	竪穴住居29			(10.0)	砂粒少量含む	良好	10Y7/1灰色	口径残存15%
36	土師器	皿	土坑139	9.2	(2.1)		精良	軟質	5Y8/2灰白色	口径残存20%
37	土師器	皿	土坑139		(3.1)		緻密	やや軟質	2.5Y8/1灰白色	
38	瓦器	鍋	土坑139		(2.0)		長石含む	軟質	N8/0灰色	
39	瓦器	釜	土坑139		(4.9)		砂粒微量含む	軟質	10Y8/1灰白色	
40	土師器	皿	柱穴66：掘立柱建物1	9.2	1.7		砂粒微量含む	やや軟質	7.5YR8/3浅黄褐色	口径残存15%
41	土師器	皿	溝16	6.4	1.3		精良	良好	7.5YR8/4浅黄褐色	口径残存75%
42	土師器	皿	柱穴61	9.6	1.9		緻密	良好	7.5YR8/2灰白色	口径残存40%
43	土師器	皿	柱穴52：掘立柱建物2	11.2	(1.7)		緻密	良好	7.5YR 7/4にぶい橙色	口径残存15%
44	土師器	皿	溝16	11.4	1.9		緻密	良好	10YR7/3にぶい黄褐色	口径残存20%
45	染付磁器	椀	柱穴58：掘立柱建物2	11.4	5.2	4.6	緻密	良好	N8/8灰白色	口径残存45%

※ () は残存値

5. ま と め

今回、村ノ内町遺跡の北東部において検出した遺構・遺物は、縄文時代・古墳時代後期から飛鳥時代・室町時代以降の大きく3時期に分けられる。以下では、その成果について簡単にまとめた。

1：縄文時代 縄文時代中期に属する土坑を検出したことと、晩期に属する土器が出土したことにより、村ノ内町遺跡には、縄文時代の遺構・遺物の存在が明らかとなった。この周辺においては、当地から南西約1.1 kmの距離に位置している上ノ段町遺跡で、縄文時代早期から前期の遺物包含層が検出されているのみで、縄文時代の遺跡分布について新たな知見を得ることができた。

本調査で検出した縄文時代中期末以降の遺構・遺物の存在は、これが立地した常盤、太秦の低位段丘が安定し、活動が可能になった時期を明瞭に示唆したものと見える。

2：弥生時代 当遺跡は、弥生時代の遺跡として認識されていたが、今回の調査では当該期の遺構を検出できなかった。しかし、弥生土器は少量であるが調査区内の後世の遺構埋土から混入遺物として出土している。遺跡内北部では調査例が少なかったが、今回の遺物出土により、ほぼ全域に遺構・遺物の分布が広がるとみられる。

3：古墳時代後期から飛鳥時代 今回の調査では、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居を12棟検出する成果があった。これらの竪穴住居は、確実に壁溝が確認できた遺構であり、平面形が方形を呈する落込み状遺構や、焼土の痕跡が見られるだけのものは除外しているが、今後の詳細な検討により、竪穴住居の数はさらに増える可能性が有る。

以前の調査においては、村ノ内町遺跡南部において竪穴住居の検出があったが、北部に当たる今回の調査地点においても多くの竪穴住居を検出することができた。

調査地の東側には、双ヶ岡の西側を御室川が南流する。また、西側には、鳴滝桐ヶ淵町付近から京福電鉄北野線沿いに南下する常盤窪町・太秦西蜂ヶ岡町・帷子ノ辻に至る旧河道が現在の地形からも読みとることができる。調査地は、この旧河道に挟まれた馬背状のやや高まりの上面に位置していることがわかり、この高まりの地形が、南側に続いていき、広隆寺周辺にまで達する。

広隆寺周辺では、広隆寺旧境内の南東隅・北東隅、丸太町通と城北街道の交差点付近で、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居が数多く発見されている。今回検出した村ノ内町遺跡の竪穴住居は、これらの中で最も北側に位置し、この時期の広隆寺東辺から北にかけて存在する集落の一端が明らかになった。

4：室町時代以降 調査区中央部では、ほぼ南北方向の溝16を検出している。この溝の西側では、方位をほぼ同じくする掘立柱建物1・2を検出している。また、溝の東側ではほぼ東西方向を示す柱列3を検出している。この溝16より東側は、御室川の方角になだらかに傾斜する地形になっており、溝を境に土地利用が異なるものと考えられる。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	むらのうちちょういせき							
書名	村ノ内町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-3							
編著者名	小檜山一良・上村和直							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年7月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むらのうちちょういせき 村ノ内町遺跡	きょうとしょうきょうく 京都市右京区 ときわでぐちちょう 常盤出口町5 番地他	26100	907	35度 01分 16秒	135度 42分 33秒	2010年5月 6日～2010 年6月10日	258m ²	集合住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
村ノ内町遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	縄文土器		縄文時代中期の土坑を検出した。 古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居を12棟検出した。		
		弥生時代		弥生土器				
		古墳時代後期～飛鳥時代	竪穴住居、土坑、落込み状遺構、小穴	土師器、須恵器				
		室町時代以降	掘立柱建物、柱列、溝、土坑、柱穴	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、国産磁器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-3

村ノ内町遺跡

発行日 2010年7月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961